

異世界転移した先がΩ
の存在しない世界で、
唯一のΩカントとして
王宮に幽閉され三人の
王子に「お前の子宮は
国家の財産だ」と奪い
合われる話

「っ……う……」

声を殺した。殺したのに、下腹の奥がじわりと熱を帯びる。あるはずのない場所が。三日前まで存在しなかった裂け目が。

「匂うな」

冷えた声だった。金髪の男——第一王子ディートリヒが、蓮のうなじに鼻先を押し当てる。深く、ゆっくりと、獣が獲物の値踏みをするように息を吸い込んだ。

「やめ、ろ……っ」

「お前に拒否権があると思っているのか」

指が一本、増えた。

「ひ……っ♡」

カントの内壁が、二本の指に押し広げられる。ぬるり、と粘液が滲んだ。自分の意思じゃない。この身体が勝手にやっていることだ。男だった。三日前まで、普通の男だった。営業三年目の、彼女なしの、どこにでもいる——

「深さは十分。締めりもいい。医官の報告通りだ」

指が奥を抉った。

「あっ……っ♡　そこ、は……っ」

子宮口。指先が触れた瞬間、視界が白く弾けた。カントの奥——自分でも触ったことのない場所を、ディートリヒの長い指が容赦なく押し上げる。

「ここか。——反応がいいな」

「ち、が……っ♡♡ 反応なんか、してな——あ♡♡」

してる。してしまっている。カントがディートリヒの指を噛むように締め上げ、ぐちゅ、と卑猥な音を立てた。太腿の内側を粘液が伝い落ちる。

「お前の身体は正直だな」

ディートリヒの声に感情はない。品定め目の刃を検分する鍛冶師の目。

蓮は唇を噛んだ。屈辱で視界が滲む。泣いてなんかいない——泣きたくないのに、身体が泣いている。カントが、泣いている。

指が引き抜かれた。ぬぷ、と音がして、蓮は自分の身体に吐き気がした。

「十分な機能だ。使える」

ディートリヒは粘液に濡れた指を一瞥し、蓮に背を向けた。扉が閉まる。鉄の錠前が噛み合う、冷たい音。

蓮はベッドの上で膝を抱えた。股の間がじくじくと疼いている。ディートリヒの指の感触が消えない。奥を押された残響が、下腹の芯で脈打っている。

——帰りたい。

元の世界に。元の身体に。こんな場所が存在しない、普通の男の身体に。

「……なんだよ、これ……」

声が掠れた。誰も答えない。塔の窓から差し込む西日だけが、蓮の肌を橙に染めていた。

＊

午後、扉が開いた。

黒髪に灰色の瞳。革張りの手帳を抱えた痩身の男——第二王子ジークフリート。

「初めまして。僕はジークフリート。兄上とは違うアプローチを取らせてもらうよ」

穏やかな声。柔らかな笑み。だが蓮は壁際から動けなかった。背中に石壁の冷たさが食い込む。

「……もう、身体検査は済んだはずだろ」

「検査？ 兄上がやったのは査定であって検査じゃない。僕がやりたいのは、もう少し科学的な計測だよ」

手帳を開く。羽根ペンを構える。

「カントに感覚はありますか。性的な刺激に対して、元の性器とカント、どちらがより強く反応しますか」

「……答えない」

「では、実測しましょう」

笑顔のまま、ジークフリートが指を振った。蓮の手首が見えない力で寝台に縫い止められる。

「なっ——」

「暴れないでください。正確な数値が取れなくなる」

ジークフリートの長い指が、蓮の夜着の裾を捲り上げる。
丁寧に。ゆっくりと。急がない。蓮が恐怖で身を強張らせる
過程すら、観察している。

「まず、外部刺激への反応を計測します」

指先がカントの表面を撫でた。

「ん……っ♡」

「既に充血していますね。兄上の査定の残響かな」

ディートリヒに触られた後、ずっと疼いていた。その事実
を指摘されて、蓮の顔に血が昇った。

「ち、が……午前のととは関係な——」

「嘘ですね。分泌量が通常時より明らかに多い。兄上の刺激
で感作された状態が持続している」

さらさらとペンが走る。蓮の羞恥が、文字になってインク
に染み込んでいく。

「次に、内部の反応を見ます」

金属の器具だった。細い管のような形状。先端が丸く磨か
れている。冷たい。

「何、それ——入れるな、やめ——」

ずぶ、とカントに押し入れられた。

「あ……っ♡♡」

冷たい金属が内壁に触れる。それだけで、カントがきゅうっと締まった。粘液が器具の表面を伝い、じゅくじゅくと音がする。

「内壁の反応は良好。異物を排除しようとする収縮と、同時に粘液の分泌が促進されている。受け入れる設計だ」

器具が奥へ進む。

「深度8センチ……10……12——」

「やめ……っ♡♡　そこ、奥、無理……っ♡♡」

「ここが子宮口ですね」

器具の先端が、蓮の最も奥の壁に触れた。

「あ、おあっ♡♡♡」

身体が跳ねた。魔術の拘束がなければ寝台から転がり落ちていた。子宮口を押された瞬間——頭の奥で何かが炸裂する。快樂なのか苦痛なのか、区別がつかない。ただ、全身が痙攣した。

ジークフリートの瞳が光った。

「子宮口への刺激で、全身の筋肉が不随意収縮。カントの締め付けが——計測不能なほど強い」

「やだっ……やめ……もう……っ♡♡」

「もう少しだけ。角度を変えて計測します」

器具が抜かれ——代わりにジークフリートの指が入った。

「う……っ♡」

「器具よりも指のほうが反応がいい。体温に反応するのか、生体由来の刺激に選好性があるのか」

蓮の内壁を、学者の指がゆっくりとなぞる。子宮口の周辺を、円を描くように撫で回した。

「ひ……あ♡ あっ♡♡ そこ、触るな……っ♡♡」

「時計回りに刺激すると、分泌量が増加する。反時計回りだと——」

「おおおおっ♡♡♡」

「——収縮が強くなる。なるほど」

さらさら。ペンの音。蓮が喘ぐたびに、一行ずつデータが増えていく。

（やめろ……やめてくれ……俺の身体を文字に変えるな……）

「最後に、ペニス側の反応も確認させてください」

「は……？♡♡」

ジークフリートの空いた手が、蓮の性器に触れた。硬くなっている。カントに触られているだけで、勝手に勃起していた。

「やめ……っ、触るなっ、そっちは——」

「カントへの刺激が、男性器の勃起に直結している。二つの性器が連動しているということか」

カントの中で指が子宮口を押し上げながら、もう一方の手が蓮のペニスを握った。

頭が弾けた。

「お……♡♡ やだ、なに……っ♡♡ 前と後ろ、同時は……っ♡♡ おかしく、なる——♡♡♡」

「前後の同時刺激で、反応が指数関数的に増大する」

ジークフリートの指が、子宮口をぐりっと押し込んだ。

「おおお——っ♡♡♡♡」

蓮のカントから、粘液が噴いた。ペニスからは精液ではなく、透明な液体が垂れ流れる。全身が弓なりに反り返り、目の焦点が飛んだ。

「——子宮絶頂。刺激開始から14分。分泌量——多量。素晴らしいデータだ」

ジークフリートは蓮の痙攣する身体を見下ろしながら、手帳に書き込んだ。

蓮は意識の端で聞いていた。データ。標本。道具ですらない。ディートリヒには道具扱いされ、ジークフリートには標本扱いされている。

（——俺は、人間なのに）

カントが、まだ痙攣している。ジークフリートの指の形を覚えてしまったかのように、きゅう、きゅう、と締まっては緩むを繰り返す。

「前と後ろ、どちらの性器もきちんと機能している。本当に素晴らしい標本だ」

標本。その言葉が、蓮の自尊心を最後の一片まで削り取った。

＊

夕刻。三人目が来た。

赤毛に緑の瞳。花束を片手に。

「ごめんね、兄上たちが怖い思いをさせたでしょう」

コンラート。三兄弟の末弟。蓮の隣に座り、食事を並べ、笑顔で話しかけてくる。

「レン——って呼んでもいい？」

「……好きにしろ」

「兄上たちのやり方は酷いよ。お前は道具じゃない」

蓮の胸が軋んだ。たった一言。その一言が、消耗しきった蓮の防壁に罅を入れる。

「……お前だけだな。そんなこと言うの」

「だって本当のことだもの。レン、辛かったでしょう？ 知らない世界に連れてこられて、身体まで変えられて、兄上たちにあんなことされて」

コンラートの手が、蓮の髪を梳く。柔らかい手つき。蓮は——ほんの少しだけ、その手に縋りたくなった。

（駄目だ。信じるな。こいつも王子だ）

「俺は兄上たちみたいにしない。お前が嫌なら、やらない」
——その瞬間、蓮の鼻腔を、甘い匂いが刺した。

若い草と柑橘を混ぜたような。コンラートの匂い。αの匂い。

カントが、ぴくりと反応した。

「っ——」

下腹が疼く。じわりと、粘液が滲む。ディートリヒの匂いで反応し、ジークフリートの指で絶頂させられた身体が、三人目のαの匂いにも勝手に応えている。

「ねえ、レン。……俺の匂いで、反応してる？」

コンラートの声が、一段低くなった。

「ち、違う……っ♡ これは勝手に——身体が——」

「分かってるよ。身体が勝手に反応するんでしょう？ 辛いよね」

コンラートの手が、蓮の頬に触れた。涙の跡を親指で拭う。

「でもさ、我慢するほうが身体に悪いよ」

唇が重なった。

ディートリヒもジークフリートもしなかったこと。キスを、コンラートだけがした。柔らかく、甘く、蓮の口腔にゆっくりと舌を差し入れて——

「ん、う……っ♡♡」

コンラートの舌が蓮の舌を絡め取る。唾液が混ざる。甘い。αのフェロモンが唾液にも含まれているのか、キスをするだけでカントが疼いた。じゅくり、と音がするほどに。

「兄上たちには、お前が俺を選んだって言おう。そうすれば毎晩違う男に犯されなくて済む。俺一人だけが、お前を抱く。それでいいでしょう？」

選択肢に聞こえた。でも蓮の頭の冷静な部分が警告している。これは罠だ。コンラートを選べば、コンラートの所有物になる。しかし毎晩違う王子に――

「……考えさせ――」

コンラートの手が、もうカントに触れていた。

「ひっ……♡♡」

指が割れ目に沿って滑る。ディートリヒの暴力的な手つきでもなく、ジークフリートの実験的な指使いでもない。蓮の身体が最も反応するポイントを、最初から知っているかのような――

（なんで……分かるんだ……こいつ……♡♡）

カントの入り口を、くにくにと柔く揉まれる。焦らすように。中に入れそうで入れない。蓮の腰が――恥ずかしいことに――もっと奥に触ってほしいと、ひとりでに揺れた。

「俺のこと、気持ちいい？」

「ちが――あ♡♡ 気持ちよくな――」

指がするりと中に入った。一本。柔らかく、深く。カントの内壁を丁寧な撫で上げる。